

## 特定非営利法人 TECUM 設立趣旨書

数学教育は、古来より人智の奥儀を究める人材育成の基盤となってきましたが、科学と技術が結合して巨大な力を発揮する近代以降、産業、経済の要として意識されるようになり、社会の発展とともに、高等教育への志願者の増加傾向が産まれると、中等教育における数学教育の意義が、ますます大きくなってきました。にも拘らず、数学教育、とりわけ近年のわが国におけるそれは重大な問題点を孕むものになっています。一般の人には、唐突に映るであろうこの現状認識を少しだけ敷衍して説明します。

中等教育、とりわけ後期中等教育(わが国では高等学校)における数学の教員は、教員養成系学部・学科に加え、数理についての指導的な役割を期待される指導的な教員として、理学系数学科を中心に、自然系諸科学の専門学科においても教職課程で免許が与えられて来ましたが、他の専門分野と同様、競争的な環境におかれた理学系大学の数学教育においては、先端的な、しかし狭い専門分野の教育に重点がおかれ、古代から近世初期(17世紀)までの数学的知識の再構成を担う中等教育、特に後期中等教育の指導者(教員)候補者を、現代数学に至る18世紀以降の数学の展開や、日々変容・発展する自然科学、技術と数学との密接な関係の理解を視野において養成することにはまったく成功していないからです。そのことの端的な結果は、中学、高校という人間の成長にもっとも重要な段階の数学教育を担う教員が、現代数学への眼差しや、現代の諸科学の中での数学の意味を理解することなく、「検定教科書の内容を素早くこなす」、「実戦的な受験問題集をあてがう時間を確保する」という形ばかりの「授業」を行なう日常が、一般化/標準化してしまっている現状に現れています。やや単純化していえば、好むと好まざるの違いこそあれ、ほとんどすべての中学高校の数学教員が、自分達が中学生、高校生のときに得た知識だけで教壇に立たされている、という現状にあると言いかえることもできるかと思えます。数学の学習者に対して、《数学的な思考の喜び》や《数学的な発見の感動》を伝えるという数学教員本来の使命を放棄するかのように、多くの熱心な数学教員が、「課外活動」か「受験指導」のいずれかへの逃避をしていることに疑問をもてていないような現状は、そのための前提となる、自分自身の豊かな学理的体験と、知識人としての知的な余裕が与えられていないからであると考えます。この状況の自明な結果として、実にわずかな「合格者実績」を、歴大な数の「数学嫌い」という《若き可能性の屍》の上に築いていることに現れています。数学教育が、人々を、新しい階級的分断へと振り分け選別する装置として機能している現状は、数学の立場から見ても、またこれからの一層高速化する技術革新と一層混迷を深める世界情勢の中での日本の未来を考えてもまことに残念なことであると思えます。

とは言え、全国に目を拡げれば、数学的に幅広い学識をもち、それに基づいて優れた数学教育を実践している数学教員は、少数ではありますが確かに存在します。ただし、最大の問題は、そのような優れた教員が、それぞれの学校、それぞれの教育現場で、垂直的な指令伝達と水平的な全員一致を指向しがちな「教員同士の輪」を乱す異端分子として孤立し、数学教育の新しい奔流を形成し得ないまま、消耗戦を強いられていることです。このような数学教員の学理的世界への理解を尊重し、独創性豊かな教育実践を広く公開し、さらなる深い数理世界への憧憬を育むような仕組みができれば、単に優秀な教員の輪が広がるだけでなく、才能に恵まれた優れた若者を発見し、その才能をじっくりと開花へと導く本当の意味での教育の文化も育まれて行くに違いないと考えます。

我々法人の、他の法人と異なる最大の特徴は、現代数学の学理と、諸科学・技術の発展

の双方を、遠く、しかし明確に視野において、中等教育の再構成の可能性を、具体的な詳細に渡り、かつ数理的な学理と実際の教育現場がおかれた状況とを両睨みして研究するという《方法論的立場》にあり、そして、それを通じて、数理的な学識への敬愛に満ちた切磋琢磨する《数学教育者集団の形成》を数学者、数学愛好家、自然科学者と一緒に、そしてまた予備校講師、数学系出版社・編集者との協働として実現しこれを通じて、いまはすっかり分断されてしまっている《数学と数学教育との市民的な架け橋》、《数学者と数学教員との市民的な架け橋》の構築を目指します。

そのために、定期的に、研究会・シンポジウム(ときに、より啓蒙的な意義を担う公開教育ワークショップ)を開催するとともに、研究機関紙『数理教育のロゴスとプラクシス』を刊行することによって研究を蓄積しつつ、その再編集を通じて『TECUM 数理教育叢書』を刊行して研究活動の成果を世に問うことができると考えています。

その際、数学教育実践家の特有の閉じた世界に安住することのないように数理科学の学識深い指導的な数学者のご指導や数学研究者のアドバイスをいただきつつ、教育現場の教員が、学理的な権威に拝跪・萎縮することないように配慮して上の事業を実現していきたいと考えています。

当初は、研究会は、東京都市圏での開催、首都圏の数学教員を中心として出発しつつも、公開ワークショップなどは、行政とも協力して次第に広く、やがては全国展開を目指し、さらに国内外の人々と協力して国際的にも拡大充実していきたいと計画しています。

この新しい運動は、最初は、実にささやかなものですが、単なる少集団の個人的な想いを社会的な知として共有することを通じて、大きなうねりを産む契機になると敢えて楽観的に考えています。現場の数学教員の中に、18世紀以降にも大きな発展を遂げた現代数学の知識、21世紀に進展する諸科学の知識に触れ、自ら勉強する道が開かれており、そのような努力を奨励する組織と場が存在することの確実な情報が伝われば、冒頭に述べたようなわが国の否定的な状況を打開する可能性が生まれるでしょう。この楽観の裏付けは、わが国の教員の知的な水準は、そもそも、国際的に見ると決して低くはないことにあります。

私達の研究的運動体は、2017年8月に設立を発起され、一般会員、賛助会員の自発的な組織として会員数を拡大し、以来、3ヶ月おきに「TECUM 数理教育セミナー」を開催し、その成果を研究機関紙『数理教育のロゴスとプラクシス』としてまとめてきました。

しかし、正式のNPO法人として認証されていないため、特に、賛助会員から会費をいただくのに、個人名義の金融口座への振り込みをお願いしなければならず、さらに、企業や、教育機関を法人一般会員、法人賛助会員へと勧誘する上で小さからぬ困難を抱えてきました。NPO法人として認証していただくことができれば、当面、私達が直面しているこの深刻な問題に突破口とって良い解決が見えてきます。

以下は、申請に至るまでの簡単な経緯です。

平成29年8月有志で、TECUM 設立準備会を開催。任意団体「TECUM」設立と特定非営利活動法人設立に向けての準備(「予算委員会」、「定款委員会」、「機関誌委員会」、「夢委員会」の設置と各委員会の主査の選出)を決議

平成29年9月「TECUM 予算委員会」開催(以後数回、会員種別、会費の決定)

平成29年9月「TECUM 定款委員会」開催(以後数回、非営利活動法人としての円滑な運営のための規則整備)

平成 29 年 9 月 「TECUM 機関誌委員会」開催 (以後数回、季刊研究機関誌『数理教育のロゴスとプラクシス』と隔月広報誌『TECUM Letter』の編集、発行に向けての基本方針の策定)

平成 29 年 9 月 「TECUM 夢委員会」開催 (以後数回、TECUM としての活動への社会的な期待の調査と検討)

平成 29 年 12 月 「隔月広報誌 TECUM Letter 創刊準備号」発行

平成 30 年 2 月 「隔月広報誌 TECUM Letter 創刊号」発行

平成 30 年 2 月 TECUM 第 1 回 数理教育セミナー開催、研究機関誌『数理教育のロゴスとプラクシス 2 8 1 8 年 2 月号』発行、併せて特定非営利活動法人 TECUM 設立に向けての、一般会員による総会の開催 (定款素案の承認と、設立時理事、監事候補の選出、理事監事による定款の文言・表現の調整作業、予算・事業計画の詳細化作業の一任の承認)

平成 30 年 2 月 研究機関誌『数理教育のロゴスとプラクシス 2 月号』発行

平成 29 年 4 月 「隔月 広報誌 TECUM Letter 第 2 号」発行

平成 30 年 5 月 TECUM 第 2 回 数理教育セミナー開催、研究機関誌『数理教育のロゴスとプラクシス 2 0 1 8 年 5 月号』発行。併せて、特定非営利活動法人 TECUM 設立に向けての一般会員による総会開催 (具体化された定款の承認を目指したが、文書として成文化が完全な合意を得るまでの完成度に足りていないという指摘があった。)

平成 30 年 6 月 「特定非営利活動法人 TECUM 設立」のための設立総会開催 (定款を含む詳細化された文書類の再確認と申請への合意と承認)

平成 30 年 6 月 24 日

設立代表者

住所又は居所

東京都中野区白鷺 1 丁目 10 番 5 号

氏名 長岡 亮介 印